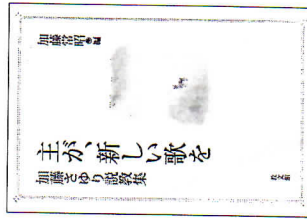


神の救いの現実へと導き入れる説教  
加藤常昭編

主が、新しい歌を  
加藤さゆり説教集



森島 豊

私よりも先に本書を手にした妻は開口一番こう言った。「読みやすい。分かりやすい」。実際に手にとって読んでみると、自然と心の中に言葉が入ってくる。一見難しい旧約聖書の言葉も、自分のこととして聴くことができる。そして、説教を通して聖書を読みだくなる。本書のどこを開いても、加藤さゆり先生の優しさ、人柄、そして信仰が伝わってくる。

本書は一人の女性伝道者・加藤さゆり先生の説教集である。これを編んだのは夫である神学者・加藤常昭先生である。素朴に聖書を語るその言葉が、驚くほど心に響く。さゆり先生は複雑なことは語っていない。ただ聖書の現実と聴衆の現実を率直に語っておられる。その聖書が証する福音の力に引き込まれていくのである。

「家庭的な声」（七頁）と評されたこともあるこの説教者の言葉は、牧会的な声（魂への配慮）として響いている。育児の苦勞、人間関係で疲弊した心、厳しい闘病生活の孤独、その全ての心に寄り添っておられるのが分かる。回りくどい言い回しなどしていない。聴き手の現実のスツと入ってくる。教会に生き

る人と共に過ごし、よく話を聴き、惜しむことのない愛の労苦の中から紡ぎだされた言葉であることがよく分かる。まるで母に語り掛けられているように素直に聴くことができる。

けれども、説教者は闇の中に止まらない。私たちの知る罪の闇の世界から、キリストの現実へとすぐに引き込んでいく。その優しい人柄からは想像できないほど力強い言葉で語っている。しかも説教者の直感ではなく、聖書そのものを紹介している。人が経験する暗闇もキリストの現実も、すべて聖書の言葉を通して紹介しているので、安心して聴くことができるのである。

また時に、雷のような鋭い言葉で目覚めさせる。「人間が生み出したものに、人間を救う力はないのです。神がなしてください。さらなければ、人間の救いは成り立たないのです」（三三―三五頁）。どこを開いても、この説教者の揺らぐことのない神への信頼が感じられる。御言葉への確信を慰めの言葉として宣言している。聴き手は自然に聖書の信仰に心を合わせ、神へと導かれる。何よりもこの説教者自身が聖書の言葉に魅了されており、聖書の言葉を味わう喜びにこちらも引き込まれていく。

中でも、病を抱えている者への共感を強く感じる。おそらく、ご自身が病の苦しみをよく知っておられたからだと思う（三六―四〇頁）。病を負う聖書の詩人の経験を紹介しながら、詩人を生かした神の救いの現実へと導かれている。キリストの福音に生かされている説教者自身の信仰告白の言葉としても聴こえてくる。福音に生かされている伝道者の言葉を聴いて、慰められた人々がどんなにいたかと思う。

女性伝道者であるが故の苦勞も多かったと思う。けれども、その苦勞を微塵も感じさせないしなやかさを感じる。受け取る人によっては失礼と思われる言葉をも、さゆり先生は柔軟に好意的に受け止めておられる（四一―四五頁、二一九―二二〇頁）。それは先生の性格だけではなく、そのように先生を生かしてきた福音の力によるものだと感じる。「柔和な心」という説教は必読である（二二六―二三六頁）。誰に対しても柔和な心そのもので接したさゆり先生のことがよく分かる説教である。

本書からは、キリスト者の夫婦がこの地上での最後の日々をどのように過ごすのかについても深く教えられる。厳しい病床生活にあるさゆり先生を看取られている加藤常昭先生は、この人を生かし続け、今も生かしておられる神の現実にも耳を傾けられた。そのキリストの愛の言葉は、ご自身だけでなく、多くの人の慰めの言葉として響くに違いないと確信しているのだと思う。

私の妻は、心病む友人のために毎日一つ、さゆり先生の説教集から心に響く一節を送っている。本書には自然とそうように他者に贈りたい言葉があふれている。説教者にも信徒にも求道者にもぜひ勧めたい一書である。

（もりしま・ゆたか＝青山学院大学准教授、大学宗教主任）

（四六判・三六八頁・本体一五〇〇円＋税・教文館）